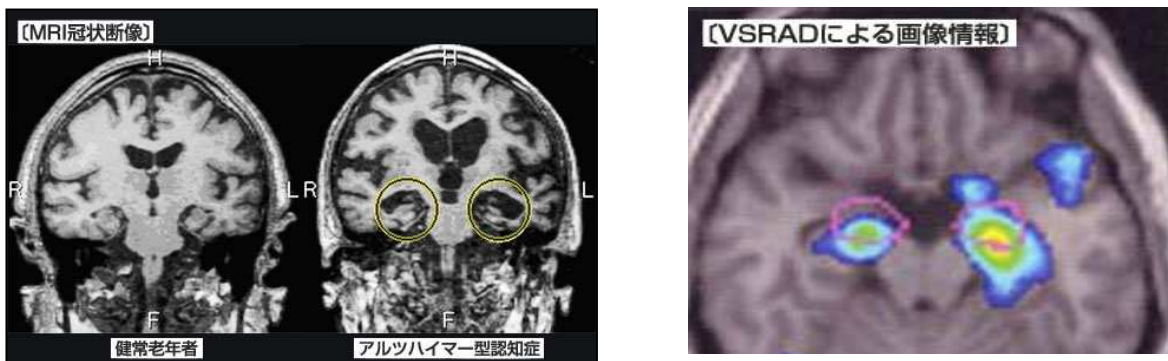


MR I・PET/CTによるアルツハイマー型認知症の画像診断

最近の報告では、認知症の方が200万人と推計されています。原因疾患別に10%がレビー小体型、30%が血管性、その他10%、そして50%近くはアルツハイマー型認知症といわれています。数年前に治療薬が発売され、現在も新薬が多く、多くの製薬会社で開発・販売とのことですが、発症早期が最も薬効があると言われていています。

したがって早期発見早期治療がアルツハイマー型認知症のキーワードとなっております。早期診断には、記憶の中核である海馬周辺における形態上の萎縮を、MRでみる『VSRAD』という方法が可能となり、入間ハート病院・所沢PET画像診断クリニック共に検査可能になっています。アルツハイマー症における脳萎縮は海馬領域の萎縮の度合いに関係すると言われていています。今までは画像検査の視覚評価は難しいとされていましたが早期AD診断支援システムの導入により萎縮度合いをスコア化し診断を行います。最終判断は専門医になります。

早期アルツハイマー型認知症診断システムの画像での解説



健常老年者でも大脳萎縮は見られるが、認知症者の萎縮の方が大きい。萎縮のあったところを写真のようにカラー表示する。海馬領域（○印内）の萎縮はアルツハイマー型認知症に特有。ピンク色に囲まれた場所が海馬領域でここに萎縮がある事がわかる。

脳の萎縮はR I 検査にて脳血流検査をします。当院ではPET検査を併用し診断精度の向上を計ります

脳萎縮より早期の海馬等の血流低下を調べるシンチグラムが推奨されています。所沢PET画像診断クリニックでは糖代謝の低下をみて、さらに早期発見につながる脳PET (FDG)を行います。

所沢PET画像診断センター 脳PET検査画像

